

『緋文字』におけるヘスターの救いについて

青山 義孝

19世紀アメリカを代表する小説家ナサニエル・ホーソーンの代表作『緋文字』は、17世紀のピューリタン社会を背景に若妻ヘスター・プリンと若き聡明なる牧師アーサー・ディムズデイルの姦通を描いた作品である。よく指摘されるように、姦通にいたるプロセスや姦通の現場はまったく描かれることがなく、姦通の結果不義の子パールが生まれた時点からストーリーが始まるという、世にもまれなる姦通小説である。殖民開始間もない17世紀前半のピューリタンの牧師の姦通を扱った衝撃的な内容の作品だけに、これまで多くの批評家によってさまざまな解釈が試みられてきたが、従来の批評は姦通の罪のもつ宗教性に注目するものとそうでないものとに大別できる。概してディムズデイルに焦点を合わせる批評家は宗教性に注目する傾向が強いが、ディムズデイルの救いをめぐっては、救われているとみなす批評家と救われてはいないとみなす批評家に二分されている。一方のヘスターに照準を合わせる批評にも実にさまざまな解釈が百出しているが、ヘスターを待ち受ける運命、すなわちヘスターが救われているのか否かに関しては、救いを否定する見解が批評家のほぼ一致した見解であると言ってよからう。

ホーソーンは作品の最後でヘスターとディムズデイルの墓を描写することによって来世での2人の姿を暗示しているが、この墓の描写が従来のヘスターの救いを否定する解釈のよりどころとなっている。

And, after many, many years, a new grave was delved, near an old and sunken one, in that burial-ground beside which King's Chapel has since been built. It was near that old and sunken grave, yet with a space between, I as if the dust of the two sleepers had no right to mingle. Yet one tombstone served for both. (Nathaniel Hawthorne,

The Scarlet Letter (Columbus: Ohio State UP, 1962), 264)

これが問題の箇所だが、この文章はボストンにとどまることを強制されたわけではないヘスターがボストンにとどまりつづけるその胸の内を明かした文章、
There dwelt, there trode the feet of one with whom she deemed herself connected in a union, that, unrecognized on earth, would bring them together before the bar of final judgment, and make that their marriage-altar, for a joint futurity of endless retribution. (80)

さらには死の間際にあるディムズデイルに問いかけるヘスターの必死の願い

“Shall we not meet again?” whispered she, bending her face down close to his. “Shall we not spend our immortal life together? Surely, surely, we have ransomed one another, with all this woe! Thou lookest far into eternity, with those bright dying eyes! Then tell me what thou seest?” (256)

を布石として読まねばならない箇所である。先入観なしに読めば、2つの墓は並んでいるが間には隔たりがあって、一見すると、2人の亡骸には相見える権利がないかのようにも見える、ところが墓石は1つしかなく1つの墓石が2つの墓の橋渡しをしているのだ、と読める。その上で聖書的象徴体系にしたがって読めば、「ちり」(“dust”)は時間性、この世を象徴し、「墓石」(“tombstone”)は永遠、来世を象徴することとなるので、この墓の描写は、ここに眠る2人は時間に支配されたこの世では相見えることが認められなかったけれども永遠の支配する来世では結ばれているのだ、という内容になる。しかしながら、従来の大半の批評はホーソーンの記事を逆転させて、

墓石は1つだが墓の間には隔りがあるので2人は死後も結ばれることはなく、ヘスターは救済されてなどいないのだ、と読んできた。

この解釈は“Yet”という強い逆接の接続詞を無視してホーソンの文章を逆転させることによって成り立っている。ホーソンの墓の描写が、現世では相見えることを認められなかったが来世では結ばれている、という内容である以上、『緋文字』のテーマである罪と救いの問題も新たな眼で見直す必要がある。筆者はすでに『ホーソン研究——時間と空間と終末論的想像力』（英宝社、1991年）ほかでこの観点からの『緋文字』論を展開してきたが、本稿ではヘスターの悪魔的な役割に注目しながら、その救いのプロセスを明らかにしたい。

まず救いとは何かということから始めなければならないが、ホーソンがこの作品で一貫してとっている立場は、救いには苦行 (penance) ではなく悔い改め (penitence) が必要である、という立場である。たとえば、あなたはこれまでずいぶん苦行を重ねてきたのですからもう悔い改めもできたのでありませんか、と問うヘスターにディムズデイルは

“No, Hester, no!” [. . .] “There is no substance in it! It is cold and dead, and can do nothing for me! Of penance I have had enough! Of penitence there has been none! Else, I should long ago have thrown off these garments of mock holiness, and have shown myself to mankind as they will see me at the judgment-seat.” (192)

と答える。

『緋文字』は1640年代のボストンを舞台としているが、当時ニューイングランド・ピューリタン社会は、この苦行と悔い改めをめぐる分裂し、激しい論争が繰り返されていた。カルヴィン神学を母体とするピューリタニズムは本来救いにおける苦行の役割を認めていなかったが、移民当初の1630年代からすでにニューイングランド・ピューリタンの間で苦行を認めようとする動きが台頭し、苦行を認めずあくまでも恩恵の契約を主張する福音派と業の契約を主張し苦行を認める律法派に二分されることとなった。『緋文字』で2度にわたって言及されるアン・ハッチンソンも反律法主義者としてこの論争で重要な役割を演じたが、そのハッチンソンが敗れてマサチ

ューセッツ湾植民地から追放されることになったことから明らかなように、この論争は律法派の勝利に終わった。こうした歴史的事実を背景にしながら、一貫して、ホーソンは苦行を認めない福音派の立場を支持している。

姦通を犯した女、罪の象徴として生きるしかないヘスターにとっても、また罪を告白することもできないばかりか、かえって住民から聖人扱いをされることでさらに深い罪悪感に苛まれるディムズデイルにとっても、ボストンでの7年間の生活はまさしく苦行の連続であった。両者の違いは苦行で事足りりとするか否かの違いである。ディムズデイルが苦行の意義を否定していることはすでに見たが、ヘスターの苦行についてホーソンは

Here, she said to herself, had been the scene of her guilt; and here should be the scene of her earthly punishment; and so, perchance, the torture of her daily shame would at length purge her soul, and work out another purity than that which she had lost; more saint-like, because the result of martyrdom. (80)

と述べた上で、ヘスターには悔い改めの気持ちなど微塵もないと言う(84)。救いに関してホーソンが立つ立場が苦行を否定し悔い改めの必要性を主張するものである以上、悔い改めの気持ちが微塵もない以上、ヘスターは救いとは無縁ということになるが、これはあくまでも7年間の話である。ディムズデイルの死後、パールを連れてヨーロッパへ渡った後に再びボストンの地を踏んだヘスターの姿をホーソンは「結論」の章で描くが、実はこの「結論」でヘスターの悔い改めが語られることになる。この点に関しては後述することにして、その前にヘスターがディムズデイルに対して果たす役割について検討しよう。

ヘスターの夫チリングワースが悪魔的人間に変身してディムズデイルへの復讐を企てることは周知のとおりであるが、ディムズデイルにとってヘスターが果たす役割とはいったいいかなるものなのであろうか。また住民のヘスターを見る目は年月を経るにしたがって変わっていくが、はたしてヘスター自身、周囲の自分に対する評価の変化に見合うような変化を遂げているのであろうか。

ヘスターとチリングワースには、意外なことながら、重要な共通点がある。「緋文字がその役割を果たすこともなく」7年間の間「道しるべの糸もないまま」「暗い精神の迷宮」(166)をさまよいつづけてきたヘスターは「思索の自由」を身につけたのだとホーソーンは言う。

She assumed a freedom of speculation, then common enough on the other side of the Atlantic, but which our forefathers, had they known of it, would have held to be a deadlier crime than that stigmatized by the scarlet letter (164)

この「思索の自由」とは、17世紀にヨーロッパを震撼させた人間中心主義などのいわゆる「自由思想」である。ここで言う自由は、神から逃れて自由になるという意味での自由であり、神(theos)を中心にしたtheologyに対する人間を中心にしたhumanismの謂いである。当時のピューリタンが知ることになれば、緋文字が象徴する罪よりも重い罪とみなしたことだろう、とホーソーンが言う理由はここにある。同じ1つの宇宙靈魂が物質と結合して人間をはじめ万物を形成するというアニミズム的宇宙論を展開して靈魂の不死を否定し、また神の摂理をも否定して人間は星辰すなわち宿命、必然にもあそばれるとみなすベシミズム(赤木昭三「自由思想」『CD-ROM版世界大百科事典』)、これがヘスターが身につけたとされる自由思想であるが、これはまたチリングワースの思想(“a range and freedom of ideas” [123])でもある。

これに対して、デイズデイルは真の牧師であり、真の宗教家であって、どのような社会状況になっても、いわゆる「自由思想」(“liberal views” [123])などを抱くことはあり得ないにちがいない、とホーソーンは言う。デイズデイルにとっては、自分を支えてくれると同時に、鉄の枠組みのなかに閉じ込めてもいる信仰の重みを感じていることが、絶対に不可欠なものであった。が、にもかかわらず、チリングワースのような知性の持ち主を通して宇宙を眺めると、デイズデイルには、いきなり窓が開けられ、狭苦しい、息のつまりそうな部屋のなかに、自由な空気がさっと流れこんでくるような感じがするのであった。これがチリングワースが住む自由思想の世界とデイズデイルが住む信仰の世界の違いで

あるが、自由思想の自由な空気はデイズデイルにとってあまりにも新鮮な上に冷たすぎて、長く吸いすぎると気持ちが悪くなる心配があった。そこでまた、デイズデイルは、信仰の世界の範囲内へと引き上げるのだ、とホーソーンは言う。

この自由思想対信仰の構図が森の中でヘスター対デイズデイルの構図として描かれる。しかもヘスターは、直後にパールによってその試みを妨げられることにはなるものの、おのれの自由思想(“such latitude of speculation” [199])の世界、すなわち姦通よりもさらに深い罪の世界へとデイズデイルを引きずり込むことにいったんは成功してしまう。2人が姦通の罪を犯すにいたった経緯については前述の通りホーソーンは一言も述べていないが、森の場面での2人の様子などから推して、積極的な役割を果たしたのがヘスターであったであろうことは容易に推察できる。殖民が始まって10年そこそこのボストンで、牧師と信者が人目を避けて逢瀬を重ねることができる場所は森以外にはなかったと考えられることから、ヘスターは森のなかで2度にわたってデイズデイルを罪の世界へと誘惑するという、悪魔的役割を演じていることになる。ボストンという神がお定めになった(信仰の)世界から出るわけにはいかないのだよと訴えるデイズデイルを説得して、“O Hester, thou art my better angel! [. . .] This is already the better life! Why did we not find it sooner?” (201-202)とまで言わしめた上で“Let us not look back, [. . .] The past is gone! Wherefore should we linger upon it now? See! With this symbol, I undo it all, and make it as it had never been!” (202)と畳み掛けるヘスターの力とは、まさしく“the exhilarating effect — upon a prisoner just escaped from the dungeon of his own heart — of breathing the wild, free atmosphere of an unredeemed, unchristianized, lawless region” (201)に他ならない。

ピューリタンにとっては悪魔の支配する世界である森の中でこうしてその正体を露わにしたヘスターは、はたして住民たちが考えたように、7年間の間によき業(苦行)を積むことによって、罪の女から善女へと変身を遂げているのであろうか。そろそろ紙数が尽きてきたので詳述することはできないが、答えは否である。そのことを如実に物語るのが、森でデ

イムズデイルに対してヘスターが口にする “What we did had a consecration of its own.” (195) という言葉である。姦通は神聖な行為であった、と言うヘスターに罪の意識がないことは明らかである。聖書には姦淫という言葉が頻出するが、姦淫はメタフォリカルなレベルで偶像崇拜を意味する言葉である。聖書では神を人間を夫と妻の関係で捉えることが多いが、「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない」という十戒の第一戒は、メタフォリカルなレベルで、夫以外のものを夫と見なす姦淫(第七戒)に当たる。『緋文字』を単なる興味本位の通俗小説の域を脱して優れた宗教小説へと昇華させているのはこの姦通のもつ宗教的意味に他ならないのだが、ヘスターは大詰めを迎えても姦通が神に対する罪であることに気づいていない。

しかしながら、キリスト教が罪の根源とみなす自由意志によって牢獄から作品の舞台へと登場したかに見える(52)ヘスターも、選挙日の説教を無事終えたディムズデイルから一緒にさらし台に登ろうと促されたヘスターをホーソーンは次のように描く。

Hester Prynne — slowly, as if impelled by inevitable fate, and against her strongest will

— likewise drew near, but paused before she reached him. (252)

こうしてディムズデイルの死の間際になって初めて変化の兆しを見せたヘスターが、救いの条件である悔い改めへといたるのは、まだ先のことであり、「結論」でのホーソーンの言葉少な言及を待つより他ない。

ヨーロッパに戻ってパールを立派に育て上げたヘスターは、再びボストンに姿を現す。

Here had been her sin; here, her sorrow; and here was yet to be her penitence. She had returned, therefore, and resumed, — of her own free will, for not the sternest magistrate of that iron period would have imposed it, — resumed the symbol of which we have related so dark a tale. (263)

7年間の間には果たしえなかった悔い改めをこうして完成させることができたヘスターは救いに与ることができ、来世でのディムズデイルとの逢瀬を楽しむのである。

(甲南大学教授)